



本朝醫談二編



門不曾 4
番 100
卷 190

玄 盍 散 人 著

本 朝 醫 問 談 二 編

本 宅 藏 板



東のあつたけしおととんはく宗源玄盍
名を恒徳との海に江をたかふと
いふ処に年久くまゝに終るおの秋
かゝる世の如くはまゝに終る
玄盍をたかふ終る病のやうにも
といふ外邦を發散をまゝに終る
糸の玄盍をたかふやうに外邦
におされて内氣のまゝに終る

發効さるる、いふ處りれそや、
今も、さうして、
河也、いふ、
新以、
中、
お、
い、
の

お、
之、
又、
せ、
今、
の、
某、

ありたる事なりとありこの英名つけし
由よりし名ふは名もかれ事としていふに
あつてしやうは名としていふに
そ名ししやうは名ふいなるは名なり
國乃道ふしぬ人なりあるは名なり
ひよりたし名ふは名なり
いふにありし名ふは名なり
あまのし年月ふは名なり

ありたる事なりとありこの英名つけし
由よりし名ふは名もかれ事としていふに
あつてしやうは名としていふに
そ名ししやうは名ふいなるは名なり
國乃道ふしぬ人なりあるは名なり
ひよりたし名ふは名なり
いふにありし名ふは名なり
あまのし年月ふは名なり

卷乃志のふ志を...
かえは物志つるふ志をありたる文政十二年
を乃志のふ志を一日

田澤仲舒

本朝醫談二編

○本朝醫官の定額ハ職員令中務省内藥司正一人位上六掌
供奉藥香和合御藥事佑一人位下七令史一人位上初侍醫四人
正六掌供奉診候醫藥事藥生十人掌搗篩諸藥使部十人直
丁一人按今王公の室小懸香焚物乃方法ありて調合する
ハ本文藥香の饋羊なるハ隋書禮儀志陳制依梁舊應預
祠享之官大醫給除穢氣散先
齋一日服之以自潔其儀本齋制本此司八寛平八年典藥寮
文藥香の主意ハ穢氣を除みあり
小併せり官内省典藥寮頭一人位下五掌諸藥物療疾病及
藥園事助一人位上六九一人位下七大屬一人位下八少屬一人位初大
上醫師十人位下七掌療諸疾病及診候醫博士一人位上七掌諸

本朝醫談

藥及脉經教授醫生等醫生四十人針師五人位正八掌療諸疾
病及補瀉針博士一人位從七掌教針生等針生二十人按摩師
二人位從八掌療諸折傷按摩博士一人位正八掌教按摩生等按
摩生十人咒禁師二人位正八掌咒禁咒禁博士一人位從七掌教
咒禁生咒禁生六人藥園師二人位正八掌知藥性色目種栽藥
園諸草及教藥園生藥園生六人使部二十人直丁二人藥戶乳
戸案職原抄典藥頭醫道極官他人不任之とハ和丹乃人の
之任をふとりのふあれ南朝の制なり和丹の人醫局成世世
するハ朱雀圓融の朝より後此事よてむるハは家と限る
制なり」衛門府醫師一人按養老三年ニ置かる」衛士府左右

各一人按養老三年把笏ヲ續記ニ見ゆ兵衛府左右各一人
按養老五年ニ置る以外諸寮ニ醫師ありとみえて天平三
年舍人寮醫師天平四年節度使醫師續記ニ見ゆ弘仁三年
鎮守府醫師弘仁十二年大政官醫師後記ニ見ゆ永延二年
右馬寮醫師日本紀畧ニ見ゆ齋官寮の藥部司新任辨官抄
ニ見ゆ凡國醫師國別一人醫生十人上國八人中國六人下
國四人太宰府二人案寶龜二年多禰島ニ醫師と置かれ
予續記ニ見ゆ尚藥一人掌供奉醫藥之事典藥二人女孀四
人按屠蘇酒の藥子もこの職掌するへ」施藥院令は不
載職原抄四位以上任之為彼道重職是亦南朝の制なり

○太政官府臥疫之日治身及禁食物七條九是疫病名赤斑瘡初發之時既似瘡病未出前臥床之苦或三四日或五六月瘡出之間經三四日支体府藏大熱如燒當是之時欲飲冷水固忍莫飲瘡又欲愈氣漸息利害更發早不療治遂成血痢痢發之間或前或後無有定處其共發之病亦有四種或咳嗽或嘔逆或吐血或鼻血此等之中則是最急宜知其意能勤救治以肱巾並綿能勒臍腹必令溫和勿使冷寒鋪設既薄无卧地上唯於床上敷簟席得卧息粥饘並前飯粟等計温涼任意可用好之但莫食鮮魚肉及雜生菓菜又不得飲水喫冰固可戒慎及痢之時能煮薤葱可多食若成赤白痢者糯粉和八九沸令

煎温飲再三又糯糯粳糯以湯饘冷之若有不止者用五六度無有怠緩其糯春碎勿令全凡此病者定惡飲食必宜強喫始從患發灸海松並搗鹽屢含口中若口舌雖爛可用良愈之後雖經二十日不得輒喫鮮魚生菓菓飲水及浴洗房室強行步當風雨若有過犯霍亂必發忽下利所謂勞發俞附扁鵲豈得禁斷廿日已後若欲喫魚肉先能煎炙然後可食但乾鰾堅魚等之類煎否皆良乾脯亦好但鯖及阿遲魚雖有乾腊慎不可食年魚者煎亦不可食其蜜等不在禁例凡欲治疫病不可用丸散等藥若有胸熱者僅得人參湯以前四月京及畿内悉卧疫病多有死亡明知諸國百姓亦遭此患仍條件狀

國傳送之至宜寫取卽差郡司主帳已上一人宛使早速前所
無有留滯其國司巡行部内告示百姓若無粥饘者國量宜賑
救官物具狀申送今使以官印印之府到奉行正四位下右大
辨紀朝臣從六位下守右大史勲十一等壬生使主天平九年
六月廿六日右類聚符宣抄出ッ長生療養方水松主水
腫疱瘡喉腫或曰海松とあり古人疱瘡は海松を用ひ證
あり本文ハ乾鰻のりあり今世疱瘡ハ貝類を忌とすのり
のりハ汝用ひさふハ妄有り痘毒目不入たるふのりハ黒
燒ふして用ふる醫療羅合見えより又天平九年六月興
藥寮依宣旨勘申傷寒後禁食豌豆瘡治方朝野群載出たり

其文寫誤ありてふも加て記ふよりくつる載せし
○神代ふさききとわに争ひし是醫藥のそまりこ
うききもわにを人の名ふこそ何處鯨魚ハあつらふに
續記ハ鞍作得志以虎為文學取其術虎授其針曰以此治之
病無不愈この虎も人の名ふて姓氏ハ逸して存せざるあり
名のて傳りて姓氏を記故は後世より見れハ得志ハ非類
の走獸より術を傳へし如く見ゆ
○允恭御世新羅金波鎮紀武來て御惱を治す是新羅醫學
の斯邦ふ入りし始ハ欽明御世百濟國の貢人醫師有陵陀
採藥師潘量豊丁有陀來る是百濟醫學の入りし始ハ孝徳

御世高麗毛治投化して侍醫となる是高麗醫學の入也
 始之唐土の醫書斯邦に入らずハ千金方を初と見原
 篤信りソひハ現在の書に就てソハるハ姓氏録を考ふ
 欽明御世和藥使三藥書明堂百六十卷を渡したるハ彼土
 みて梁陳の時之其子善那使主も方書渡したると見也
 是といふるも書めや知かハ想は推古十五年小野妹子
 の隋に聘せし時四海類聚方隋書經籍志二千六百卷
 四海類聚單方三百卷と文
 選をやとりて来つらん此類聚方早く斯邦に入れたるを
 大同三年醫方を撰せし時出雲廣貞安部真貞大同類聚方
 一百卷を選せし續日本後記小
 規類聚を以て書名に定めしは是隋國の書に擬せられた

至と知らしむ

○屠蘇ハ絳袋に盛るハ絳ハ茜州之阿ろ祿深のきぬを正
 式に包にそめを用るハ非之江家次第一獻屠蘇八物と
 獻古人傳へて外臺秘要に載る方二獻神明白散五物ハ千
 金翼方の方三獻度瘴散九物とあり千金方度瘴發汗青散
 ハ十味ありて翼方に出さるハ十二味之九物の別ありあるや
 本朝月令膏藥三種千創萬病膏ハ千金方傷寒黃膏の巴豆
 ちきりの升麻膏ハ丹毒門に出たる方耆婆膏ハ翼方大白
 膏大黑膏の内ありと聞けり猶有識者に尋ねへし
 ○糸脈こそ手糸脈をつげし障子成るごとく病狀をうか

ひ知あり俗問よりひ傳ふ造る証なり啓迪集序丹家嚮
三位者生而得醫髓造請中堂醫王善遊而得隔屏牽絲之脉
以て脉ハ此事なる歟又世に傳る三位法眼傳も此人の著
述ありん

○神鳴狂言ハ録事法眼雷の療治を衍義して作里しく
是りも持てぬるせしきばたや頼みあるらん中古黄
藥の行りれしを知るへ蘭室秘藏治口舌方黃藥真者と
ありを見れハ唐山ハ偽物ト
求而載歸則華中此物不多而為其所重可知寢覺の謠信濃
國祿さめの床は三かへりの翁と申者千年を抄るる其内
ハ壽命めて度藥と服し三度よりやく故ふより三かへりの

翁と名付たり是ハ三歸の字小よりて作里し謠曲之

○支山人範翁口訣 面目直視 忽作屍臭 脉陰錯語
脚踏腫起 口唇反張 爪甲黴黯 俄失尿溺 面黑聚口
肢重如石 上竄喘謔 以上絶証十條之内已見二証則必
死之漸也と道三切紙小見少切紙の書法每章筆記の年月
あり此文よのこを山人辭世の口訣るれハ天文六年を
るへ今病人小臨て二証具るをの必愈えはと斷するも
毎々たりを漢墨一紙とて寛文十一年無名氏の序せし
書あり此口訣を附行せしもの也又案切紙
ハ支山人の授記も其内は存せ
て其作皆一漢師出るよハありん

○醫師ハ補せらるて諸寮諸府小属する官名いしを補

せらまざるくまゝむりゝハ醫士と書り支山人醫士本
務五ヶ条有り天文五年二月廿六日陽光太子も道三をさして然り
左に舉るハ古今集の奥書有り

可書述之由醫之道三令然を問

天正十年孟春下旬

醫

○江村專齋永祿中ニ生れ醫を以て業と見寛文の初よりひ
きて小百歳後水尾上皇養生の法伐勅問ありける其人
の語を伊藤宗恕とりの醫の録して老人雑話と名く其中

下略

ニ云幼少あり一時延壽院玄朔ハきて小壯年まで故道三
の嗣として洛中醫師の上首の人々敬慕を故道三ハ其時耳
遠く隱居せる故玄朔盛ニ療治えやして方々招待を其時
ハ乗物といふハなく大なる朱傘をさしかけはせ木履は
て杖をつき何方へも歩行人々うらやむるまでありしと
其頃の醫師の形容ゆひ見るへい

○俗ニ藥箱を道三箱といふ去られハ今の藥箱ハ一溪師
より始りたる其以前ハ如何なる制也やあふん日本風
土記藥箱骨宿里藥刀骨宿里藥包骨宿里
白哥 乞索蜜 子未

○延喜式典藥寮儲物稱一箇藥斗一口藥升一口鐵白十口

鐵杵十枚七五枚藥刀六枚此項百味篋筒有りしものあり
りやいり

○長生療養方藥升方作上徑一寸下徑六分深八分是小升
也大升ハ九合の升也累代古物小て藥殿ニ用之湯藥方小
常ニ用る升也散藥ニ用ハ小升也これ藥ハ小升すてたか
至水ハ大升あてたか之後人水も藥を同一升を用ると
思へるハ誤也傷寒論小柴胡湯以水一斗二升煮取六升欸
者加五味子半升これ水ハ大升五味子を
かゝるハ小升こま又升のこまハ大升の湯中ニ半升の五味子
を入へりんや又升のこまハ大升の湯中ニ半升の五味子
三倍を大ともる雜令義解見也續記寶龜八年五月勅
海使史都蒙歸蕃賜綵綿等加附黃金小百兩水銀大百兩是
也

○七をサシといふハ訓ある茶匙の字音ニ散あらう
を茶一ふくろとをといふハ茶匙てい用る故之藥ハ秤と以
て今兩正し合へき之古本三世相辛巳金姓の條ニ樂士
の圖あり秤と持て至四
五百年以前のこまハ
如此形容るもと知る
續古事談ニ秤みて藥ハ合て服まへき之反魂香といふ物
あり死人の魂とかへまるの一銖もたらぬまきま
るのかしといふも



○藥の分兩制法ハ精細なをとるまきま小こそそ志をらされハ

法はにおいて大不敬不入る職制律云凡和合御藥誤不如
本方及題封誤者醫徒三年贖銅六十斤料理簡擇不精者杖
六十贖銅六斤注云不如本方謂分兩多少不如方法之類合
成仍封題其上注冷熱遲駛之類並寫本方俱進若誤不如本
方及封題有誤等但一事有誤醫師合徒三年料理謂應熬削
洗漬之類簡擇謂去惡留善皆須精細之類不精者杖六十
○貴嶺問答小僧寸白更發醫家申可令服蒜之由件僧曰出
家之後斷酒了隨不可服五辛此事可然乎且可有御教訓歟
禪師御房御不例尤不便候飲酒食肉服五辛者三十日苦使
若為疾病藥分所須三綱給其日限見僧尼令於藥分者令條

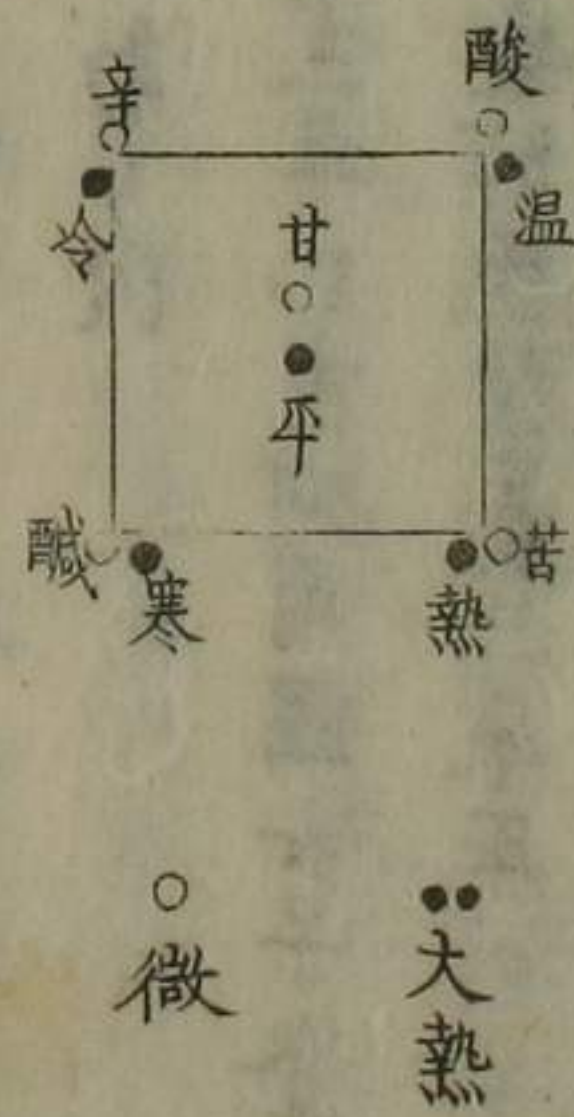
所聽也謹言此文ふゆれハ僧尼疾病の時醫師よりさくむる
葷肉ハ違犯の例又あはれ

○靈異記天平寶字三年己亥河内國女子登桑有大蛇纏之
以婚父母見之請召藥師燒梗藁三束取汁三斗煮煎之成二
斗猪毛十把剉末合汁然當爍頭足打擲懸釣開口入汁蛇乃
放往蛇子白疑如蝦蟆子猪毛立蛇子從闕出五升許古の醫
術奇といふへ斯邦の書女陰ハ開闕説文也字女陰也此
字ハ必僻字也
モ男ハ開五音篇海闕盤庚由藥由古文鳥良安ハ男陰の
象形とモハ寺島良安ハ男陰の
且字成用なれとも思ふ予ハの字を用ふ應永九年太秦牛祭の
文ハ聞風といふ病名何れ老人雜話氏郷の父ハ臆病の人

なり其時俗間の小歌は日野の蒲生殿ハ陳とさ人のいや下
 風おこゆと師語録云世は下風とも危のこ風とも云畢九
 小筋つらつらつて引つら痛むこ

○寫本は多トキヤ等の字あり書寫は便なる省文ありて
 并菩薩の類は約地知精驍等ハ二合の作字あり又一字
 名の四角は點と施て其氣味と記さる何り中古の醫オコ

ト點ふらら
 ひて作ら
 ちるる



○經書は博士家の古訓ある如く醫書にも古訓あり

膨脹 フレハリ 怔悸 マサハキ 發熱 ミホトリ 咳嗽 シハフキ

虚浮 ラモハレ 疼痛 ヒキイタ 痞悶 フレヒシ 脇肋 シハハラ

惡心 コイヤレキ 逆冷 ヒヘアカリ 倦怠 モシサヨク 泄瀉 ハラタス

喘急 アヘキスタキ 嗜臥 シヘリスレ 寒熱 フコリサメ 反胃 コチカハス

恍惚 ミスヲハク 自汗 アセカク 惡寒 シノサムク 肛門 シリンノア+

の類は福田方ハ儒士學生のよみ頗異なる間訓注を添る
 よしへて昔時典樂寮のよみとせあるへ

○拾遺集秀武法師龜山ハやく薬のみありつれととくむ
 る方もなき別哉端書ハちの國乃守とせともうまわり
 下りけるは彈正の御子の膏藥遣りし此膏藥ハ即子創

萬病膏の類に遺唐遺渤海使に以等の藥物を賜るる延喜式に見ゆ宗碩佐野の渡乃記に叟栢として興ある家つと藥をくちうの物隨身して訪來侍ると古人の藥を餞別家畏るくふらるるなり

○續拾遺集丹波經長仕こし身ハ下をうら我道の名をや雲井の代々みそくめん醫ハ賤業をれとも此道の名を後の世ふそくめんりけふかたた事ふこそ

○鬼病ハまゝひめて治るるあり瘡ハ鬼ありやめは名ハ世説注行瘡鬼小不病巨大の意ある痘ハ神あり隋園痘神之説醫學隨筆ハ膏盲二豎の訓なり此二病の咒ふるるるき和歌ありほくさおる野不見經傳

邊のまろつえや道遠き我住里まかへ里行らんほろそこの神ハと問へハおともあり此處ハいせせさうほ

○饒速日命降自天時天神授瑞寶十種若有痛所者合茲十寶二三四五六七八九十云而布留部如此為之者死人返生と職員令集解に見えり天上の語數千萬歳と經て今猶人間に存せ無上神呪といふへ

○捧心方崇病師説多以祭落為主藥治次之この師説ハ卅家の傳るるへ古き物語と見るふもの氣ハ皆祈禱を志たる諸病に祈禱の益あるる古より多し周書曰金縢あり論語子疾病子牛山活套云狐狸の類婦女子妨とあり或大病の路請禱

後血氣虚乏の時邪氣虚ふ乘して入り邪氣勝則死を早く
祈りて邪を退くへし筑紫の方より河伯の祟多し周防長門
に大神邪を作して土瓶小蛇を土瓶の中にとりたぐりの蓋毒を似たりとりの邪
祟あり此等の邪又狐付山獾のつきたるも猫まごふ
も甘松を以て熏し金銀花の煎湯を用へし或云邦人甘松
あり一ハ舶来あり一種和と稱するものハ松の若葉より五
体身分集月水止薬極葉枇杷葉和甘松煎服是るり狐狸を
ハ古諺ハ松葉いふひハ舶来の物也和漢三才圖會云凶
然るるハ牛山の用ひハ風行人逢之卒然被創謂鎌閉太知急用菜菔汁即愈痕如金
瘡蓋極寒陰毒也一書云かまいたち貴人武家るとハさく
ぬりのこ多分下賤の人ハあり切たる所
ハ唇の紙を細くちぢてたれハ愈牛山活套髪切とてあ
たるる風吹来るマ覺て結ふハより髪を切落し絶死ハ

いぢる暫時甦りて寒熱傷寒ハ
類する病あり是鎌鼬の類なり
○木乃花開耶姫産し給ひし時臍帯をきりしハ竹刀なり
よつて今世も臨産ハ竹刀を備ふるハ是太古の習はしめて
他の國ハなきりされし萬安方ハも以竹刀而切之長
六寸九良といへし大徳濟陰方ハ竹刀のりあるにて其書
ハ邦人の作るるり明のり予前編ハ治験の文をのひし
ハ過て直ハ事實を證とせざるハ未クハ
○小兒疳眼ハ用るうるき藥寒烏の腹へ車前錢つめて黒
燒ふる方板坂家珍方ニ出たり其原ハ五体身分集霍亂方
烏の鬚と爪とを去て灰と吞は是を周防藥といふよき

ハ是大同類聚方の逸方あるへー

○小兒の掌に黒藥をぬりて爪際よりふもとの糸乃如き物
と出し是疥癩の虫を取とり其黒藥を地衾のみのら後
焼ねふの花をとりつゝ皆そら言ひあれハ呪法にて尋常
の黒赤ても白きその母のつらう出る一奇術とゆふへー
唐山の書不見當らん

○痘瘡はわけの色をきる式あるるうも母のへぬと唐
錦といへり又酒湯かふる冠婚の式とありたるり
つらの頃よりあるを考ふる櫻陰腐談ハ全初心鑑を引
りりされと唐土にて痘兒必酒湯に浴せるとも云ふに蓋

酒湯ハ瘡痕をいやむ為小浴せると上代よりつひ傳へた
るるんるみまうれてあとのきえぬは酒み洗へば

愈るなり今昔物語よりえり

翻譯名義集頌部曇過蒲曇
類浮陀此云疱狀如瘡瘡去

去小瘡痕をあんとこと
りの梵語まかきり

○むののの醫ハ諸病に就て禁好物といへり百年來此沙
汰抄ろそり小なりぬ但はかまの事々あひひの
るハ二三十年は一行の病をれハ古の風儀を失をりて
先輩のつひのこせはりとすてさるし麻疹の流行近世ハ
てハ元祿四年寶永五年享保十五年寶曆三年安永五年享
和三年文政七年し享和の時予日光山に寓して此病ふか

予其時御柳本草行りれて醫家皆こゝせを用ふ予父老も
聞ふ安永の時ハかゝる物とハ遣ハさりき此病日數とこ
らへ忍へハ自然と平愈を傳經畢て大邪去るこざれハと
て日數の畢を待ハ平素無病の人こ其人宿患あれ大熱も
乘して持病蜂起し死めもいたる故ハ疹毒を消らるのこ
ろの持病を察して薬を用ひされを大事と誤る妊婦の
墮胎も亦宿患の類こ唐土の古人諸病を風寒と評せ
し頃痘麻のなきを見れハ濕熱の所爲なり
吳崑方考無熱
不癩無濕不疹
禁好物も濕熱の因と持病よりてつゝへ豫定むべき
小あゝ

○日光山客舎あり日土人早松ツタケ草を寄る者あり大き盆
を覆ふ巨尺餘こ梅雨の候も生して毒あり土人とりこも
多く傷らる況水土も習さる他郷の人をや客遊の人必食
るゝゝこれのこちの菌草の類とて毒もくま
きし和太利とつゝ草らふ人必死と今昔物語に見え八丈
島は産する一種の木の子ハ食へハ必發狂して高岸屋梁
みのぼると聞りり或云菌ハ毒ある物なりとも茄子と同
しく煮食ハ害かこ此説を信し茄子を頼て毒物とららふ
愚の至こ癸辛雜誌載嘉定乙亥僧德明遊山得奇菌作糜供
衆毒發僧行死者十餘人德明亟嘗糞得免この事吳草譜

も載て菌毒は糞汁よりとりやも唐土ありの療法少く
 斯國の人ハかゝる穢物ハ用さるゝ雜誌又云此時有日本
 僧定心寧死不汚至層理折裂而死其糞を吞免さるハ是邦
 人の天性也前編不出せる丁葉聖濟總録ニ人糞相和とあ
 穢物ハ藥ニ化すはぬあり又案雜誌定心姓平氏日本國京
 東路相州行香縣上守郷光勝寺僧也此寺今もあり相州愛
 甲郡森の庄八管山光勝寺むろハ郡を行香とかきて森
 の庄又上と下と有しちるハ森守訓同しと西教寺住潮
 音語

○請益問答心要太守令朗元房漢章二醫官為師灼艾問曰
 和尚今日灸治是灸法身耶是灸色身耶若謂灸色身色身不
 離法身若謂灸法身法身無病師贈偈云一焦通身烈焰紅塵

毛利土煖烘々老僧忍痛無它意只要衆生病掃空太守ハ平
 時宗ふして師ハ佛光國師なり二醫の名こゝ此人ハ似と
 蓋投化の人々ん

○祖花聯芳集谷源の艾の詩あり云野外收歸帶晚烟根塵
 脫盡自如綿命門一灼死中活本却從前萬病緣

○宇治川の戦已に敗れて筒井淨妙ハ平等院に入りて手負
 一處に灸治して歸りよし平家物語に見えたれハ其項
 ハ金瘡を艾灸して治せし又味噌灸あり中古の名醫打
 撲痛を温散する為に設けしと聞る皮膚をやふらさして
 肉中小微を蒜灸に比せれハ一等の妙あり

○足利直義惡瘡を患へ時乘付一州法印廿五味藥を用ひて愈ゆ後其方三好松永の家へ傳り藥味を減じて三五味と稱し打撲金瘡の藥とする後醫又一變じて婦人産前産後の藥として龍王湯安榮湯等の目と題を又小兒胎毒藥に紅花薑朮積雪州とくを入る多味の藥も亦廿五味藥に加減あり此二方今世の醫用きとも立方の人小至てハ知る人少し又瘡毒を用る三喜慈悲藥と云ふあり西忍方遊擊散萬外集要茯苓湯療治茶談百中飲名ハかゝれども大同小異ありて亦一州より出たり

○大村福吉ハ杣の字と作す江談抄に見ゆ此人治瘡

記といふ書を作すは續後記に見ゆ是ハ斯邦外科書の始まるべき保元平治以後戦争の世醫たるもの多く外科を主としてたり外科の藥ハ邦乃古方往々存せり治瘡記の逸方なるも知へり

○式部少丞家恒ハ大塔王の裔ありて奈須氏と冒し明應元年十二月九日越前守に任じ其子藏人家之法名宗圓外科をかま其子與三重恒法名清朽木牧齋ハ落馬の患を治して速效あり光源院義輝公より感狀を賜ふ其子二郎三郎重貞法名久清洛東白河に住して父祖の業をつく即玄竹法印の父あり今世感狀ハ攻城野戰の賞と思へとも昔ハ醫士と云

せとうく

○八條殿脉絶鼻氣冷予曰四逆湯可用諸醫可然と申を藥箱を携へ竹田驢菴祐乘上池に見せ民部卿法印御檢使にて調合を民部法印自煎して與之一服脉微顯二服脉全調四肢温翌日平安十餘日よして本復を秀吉公御感の餘御馬を下さると天正記に見たり今世馬ハ武弁此用と思へとも昔ハ醫士とこそせふのは

○澤庵和尚仮名書五藏の次第といふ書ハ一人の律師ありて渡唐し丹溪の術を傳へて歸る足利の三歸其流をうけて關東よたかりむろまりてあるへきを古道三一溪と

つひ一人關東へ下りて此流をつとめて上洛しける其筋ハ三歸より多聞られとも物をむろく知りたるふより都めてきぬくの此書をつくり日々談議講釋於て醫道始む初らきたるやうなる是れ當流の風ハ表より裏に入りし志ある小人の膚此こまやかある垣ちくのまは間ありて吹入やうハ覺えは風小中り風ハ傷まきと醫書ある故工夫おまらるるにして醫者の心も風ハ垣壁より吹入やう小思へやもかくの如く有るは只一氣此所為の膚を風小吹きてひゆせハ膚は有つるあつたのる氣ハ内に入りつらく熱する内ハ熱する外ハ初え塞

至て鼻つまり咽は内と成るこ然も薬を以て内とあはれ
 め風薬として風の物を拂ふやうなる性の薬成真きハ内に
 決まりたる氣の外へ追出されてゆく表はかへきハ内
 の熱氣外へうきあかりて膚の初え塞りたるも明て病を
 かるこ然ハ風を引こふたとつハ風を内へハ入らぬ表
 う冷て氣内へ引入るこ其氣を追返る薬を發散劑と
 つハあり故發散の薬ハ皆氣を下し氣を拂ふ薬又風薬
 とつハあり是ハ風を去るとつハ心ハなし薬の性風乃
 如く筋骨のほかり迄も吹入て氣を扇き出る薬性右の
 氣と下る薬ハ風薬を手傳して氣の内は決まりたる外へ

追出は風は依て起るはふよりて風を引くつと學
 風ハ内へハ入はしきこ冬の日るとハ風は吹きて道を行
 こも咳氣せざるこ和極集感冒ト氣内から切り切て道
 と行故ハ風も吹ぬ座敷に居て只の間ハ咳氣する是ハ氣
 ううつろと成たる時戸のとき間より初やくと風はあた
 り氣はつと内へ引入と其お水たる垂るはふき出
 るより風内へ入らぬハ風はよりと惣身は行且りた
 る氣内へ入るこ醫者も大く乃人ハ加中一の工夫な
 きこか中一の心持を合点せれハ素人よても身の為ふよ
 きより夫以陽入陰中動胃瀼緑中經維絡別下三焦膀胱是
以陽氣下墜陰脈上爭會氣閉而不通陰上而陽内行

下内鼓而不起上外絶而不為使扁鵲の此語古人文又從て
 漫解するの千歳の下本文よりて初て明白なり仲景
 の書も邪不押込をたる氣の經絡
 蜜柑の皮一ツ焼て生姜と咬そへて湯一杯ヲ酒少飲て
 風よりとりたる時の氣を外へ追返せハ咳氣よりさる
 こかやうのるを醫道とす方と以て藥合さるるハ誰もさる
 方ハ醫道得さるもの手本小して置さる物ハ醫道と得
 きハ方ハ病ふより何程も胸より取出さ方ともさて
 以方あをかさるるぬを好さる千金方治病三年乃知天下無方可用同意故詩胤
宗も歷著方劑無益といへ古人の成方を今の病人小引當ると丹溪ハ局方學とそりり今世古人の成方と慶を尊とさる故古の本草學不ろひり亭主や忍流覺書云西
忍入道河内國又舊友ありて行りり亭主や忍流覺書云西

節藥 三四本 味さ人覺てあらハ成るきり苦を以て脾胃を瀉
世 又云氣ハ形なき物なれハ病へき様さ一氣滯さハ其滯
 たる處の肉血藏府やむハ柳生の兵法ハ病とハ事あり
 人の身乃病も同しハ氣ヲ惣身へのひて滯さるれハ病
 ハるた授蒙聖切方 又氣うちりてさくさくたれハ病あ
氣門可並考
 是ハ氣うちくさくたれば力よましく免り得き一
 所々さまりて病をさるハ風ハ身乃肉不入らぬとも寒風
 氣ヲ追込て内ハあつまり外ハあつまりあり内血とち
 塞りて内外やむハ又内ハ物と思ハハ氣胸ヲ集めてあつ

する所の胸やむ氣ハやまひして何處なる所から病出る
 し氣滞ふれハ一切病なきし七情の病皆氣の滞し七情
 の内喜と怒と驚との三ハ氣うちりてさくふくちるあり
 まり鬱するハ五さきされとも氣の危れハ氣の力よ
 しく成せぬり得てさくさほる憂と思悲と恐
 と此四ハ皆氣集る程ふりつても氣の滞り病をやむ然
 ハ七情のさきさくこあるの外より犯す六ハ風寒暑濕
 燥熱皆天地の氣ハ人の身ふあつてやむ人の身ハ小
 ふしてよる天地の氣ハ大ふしてはよる天地の氣ハ押
 込込まけて煩東垣升陽を以て名つくる方多し益胃
 の陽氣を肌表ハ升發するあり

以文字ハなつ上げて柴胡升麻の右外の六氣ハ中れハ内乃
 氣ふさかりせまつて臟腑煩ハ氣ハ形る物されハ煩
 小るハ一氣の聚る所煩ハ氣うちせた病なきハ氣ハあつ
 まると病と一伸と無病とを面白きと思て日くく一なる
 り勝られハ氣うちりて危るハ盡たる氣を聚めたせらる
 小ハ暗き所ハ入少の間らくくしまし後て危るて起さ
 ハたせり所このひと一遠き所なりなうめるとされハ氣
 うちる身改らつめて秘は氣のちりるありする氣ハさた
 加しきふて危る静るるもて養ハ氣盡すハ氣うちつむ
 氣ハ伸るハ性されとも危れハ力なくして下へ沈む引あ

くる心持ハ菓子米つぶ氷餅何なりとも氣の洗きたる時
 ほちくとらへハ胃の氣食を迎へてのほる程ハ氣虛の
 人ハ食物少く氣を引何るこ内も外も道理ハ同一の
 道三切紙胃氣又云風呂等と一細々入汗をかきて膚を
 口訣可弁考
 けハ氣うもれてる汗ハ皆血こ内熱ハ血むきれてつけ
 ふりりて出るこ血の精うぬけてあとの血切りのやうふ
 ありてかろくむして焼酒をとりたるあとの酒ハ味も
 あきやうなるこ血ハすく志むれハよ一熱はれハある
 血ハ厚りて新しき血ハ生せざるこ右當流の病因むろ
 ハ同門の人各々ひ傳えておそありつらめ近世師承の學

を誦ひて其旨地ふおちんとん澤菴の述は頼て予輩微言
 と聞くも我得らり推し廣めてこれと論せハ豈唯病因乃
 こあらんや物として貫通せざる事なるへ
 ○古来名醫多うれと像祀をるハ昔時鑑真五條坊門大宮
至正寺小像あり
るり和漢三才 近世ふてハ三喜下總國古河城下長谷村
圖會ニ出ツ 一向寺不安前編永仙院とあるセハ許我志を襲てあ
やまきり宗長と東路のつと小永正六年文
月無載ハ下總國古河とハ所ハ所勞のりありて江春庵
として關東の名醫にて療治あり即三喜のりハ江春庵ハ寶
徳年中明小入く全九集作られ明監 三喜の像長二尺五
 寸餘手執一物散落して空拳の如く見ゆ服ハ代赭色ふ
 して梅菊の紋ちらちら平うけ乃帯黒き十徳を著せり

古河領長谷村
一向寺安置

極濟短折
躋之壽域
儼然遺像
永仰隱德

恒德題



信德寫
恒德

夫醫師の剃髮するは薩戒記永享五年九月廿日法皇御惱危
急醫師貞能法眼伺候是と初めと和事始といつりされと
養老元年詔僧尼依佛道持神咒救病徒施湯藥而療痼疾於
令聽之と續記小見也已又僧徒の醫あれを醫此僧形も有
ぬへ—嘉祿元年行蓮といひの醫あり東鑑永享以前剃髮の
醫なりといひへかへ又十徳を著するはいつの頃より
あると志し伊勢家の説は云十徳昔ハ俗人も著り宗
五記の小へ葛と白とも黒とも染て用ひ十徳の上は帯と
仕は犬追物するの時ハ素襖の上は十徳を著し烏帽子と
持たせし若呼入られはへは十徳をぬきえちり—とさ

本朝醫談

て出いもあり一十徳の裁縫ハ素襖の如し左右乃脇
とぬひふさくハ革の胸ひもありこれふ具一たる袴は
白布又白練をたくして帯ひして前まで結ひ置く紋はつ
けるにあり今世醫者の著せるも同一裁縫をれとも精好
紗なとふて色ハ黒無紋よりてむをむも革を用ひて帯を
せはるち著る故小別の物此中へふんぬれとも實
ハ同一物也

○尺素往來和丹兩流之醫師維為末代之術新播效驗以予
仍隨分秘統之某種古所現在人參龍腦麒麟竭香胡椒
縮砂良姜桂心甘草川芎當歸巴豆大黃麻僮辰灰雄黃並煉

蜜等皆形液之海物之ハ山藥牛膝牽牛子香附子紫蘂荆芥
乾葛厚朴苦辛茯苓檉皮白朮地黃麻茸石灰硫黃甘葛等之
和某者由所指之百方及執之某盤菜煎菜研菜挑菜碎砂碎
播推等定之由用之ハ潤體固ハ奇特之良藥邪妙之結法
為之之由承以之像和刻方子重方皆乃百一選方也指
方選奇方聖海總錄醫方大成等各同考以之某種大畧同為
二以仍雜和合之志以牛黃并白花蛇依雜湯之末遂如也藕
合香沁腦圓沈麝圓鹿射木圓兒絲子圓何伽陀藥并蠟茶等之
物尚也人々火燧袋之底二面々小藥器之中以齋持之以
不得貯為恥也又瀉藥者感應圓者除霍亂之妙某鬼哭散者

退瘡疾之靈方也又腫物平愈若五香連堯湯之類乎凡療病養生之術非一者於身上之按摩口中之飲食茶湯針灸雖其苦多端雜瘡小瘡對治之樣若不如乎蛭飼中風脚氣療養之法莫勝於溫泉此文をよみて當時醫流の趨伏知る小足きり且作者宰相の勢より海内乃圖籍と考へ國産の藥數十百種々中不疑殆なきもの十七種を舉らば市井の小生國産と私議してかそへるもの少く大に異に再び藥名を列し能毒を附注し愚見茲加ふ古本能毒奥書云道三の作師三喜り未後道三のいひ傳へたそ案能毒數本あり天正庚辰本ハ藥品百四十九種此より引用する是なり永祿丙寅本ハ百七十三種の慶長戊申本ハ東井師の増補有り又後ハ靈寶能毒有り

山薯蕷薯蕷能補中長肌強陰益氣虛羸下冷陽虛尿數泄精毒左腎陰液燥渴病後のあつとあつとありあり按永祿本云滯氣又貴生乾しハ皮のまゝ生ゆて乾き皮と去或蒸時ハ液脱して力るれとりのこ延喜式ハぬら子哉用陳藏器の説ハよ是其まゝ干せしるへ一萬安方小便不禁之時山芋與糯餅入鹽醬酒成糜交臨臥食之換骨抄床詰破痛不可忍薯蕷去皮研勻滑石末合為膏貼患處一書云湯火傷生山藥白砂糖とりの合て付る暫時痒く有りて愈方言本草藤藥艸の名あり

倍牛膝能月閉瘀血胞衣不下血痺肢挛腰膝痛腦痛利陰氣

益精出乳汁引諸藥下行毒妊婦胃虛不食瘀血を破とこれ
ハさむそ按方言本草冬初ちりて能洗ひ刻と灸つかふ一
書云五鱸を忌む頓醫抄鼻塞葉と鹽ふをてさけへ一又
小兒尿せまふみ煎てのほせよ三位法眼傳齒痛黒焼ふ一
て付田代方惡瘡とも何ぞと知る物と志ありて汁茂付
る一とつハ喫茶養生記非疔非癰自冷氣水氣發若瘡出
則不問強軟牛膝根搗絞以汁傳是也又云近年以來五体身
分病皆冷氣也得其意治之皆有驗桑牛膝高良姜其良藥也
福田方破癥煎千金方と引く牛膝二斤酒一斗小漬と有隣
云二斤ハ三十二両一斗ハ十合の二升唐の方擧るふ及ね

とも千金の一斗と有隣ハ二升と準せし哉知しめん為ふ
録と

牽牽牛子能中下焦暴塞經絡中邪水溢亂半身以下腫滿尿
澁便結感風濕喘促心苦下氣毒腫滿既と劇とつハとも下
元虛弱便瀉尿數脉虛軟永祿本云落胎去濕乃藥なり按益
囊抄朝顔とハ別物とや弘景の説固然りたふ小擧る物ハ
獲敬の説今の朝顔なり今昔物語味損して酸き酒と牽牛
子ととり入てのませハ利せしめてあらんやとつハとも
是に制法尖と去し古人のつひハ皮のちやく葉とともは藥
氣出さして力多れた一々尖と去よりハ炒る研漠とす

るを便とて五體身分集脹満ハ大腹水腫同体の病之初ハ
眉のまゝ腫て遍身腫豆る股の内冷へ脛の中推せハ
跡らむ或腹の中動きそは様ハ卧せハ聲ありて鳴り或
腹脹大苦しく重し牽牛子少焙貝小一酒若ハ湯入て服
よ常ハ小豆飯小豆粥を食せよ七をかひといふ故ハ訓を
かよたりて貝字を用ひり海中
の貝ハ萬安方蓬莪茂丸一劑十八西三分秘澁人加牽牛子
末二三西神驗濟陰方香附子甘松合して澡湯とて方言
本州朝日草の名あり

莎香附子能逆氣頭痛上氣胸塞吞酸虫積鬱婦の氣帶下發
汗毒表虚自汗寸口虚弱氣を降せり能そ忌鐵案元和寫藥

方耳俄小つゝおせしるハ香附子と油と小調入よ下村慶
松軒書本藥末一味と耳痛散と名つけしり小蘆掃部助書
延命散金瘡の氣付し氣上り目舞心遠くたり或胸さしつ
ら或腹痛小本藥一色能々拵細末茶一服布と湯めて用
方言本草長命草の名あり

水紫蘇能風寒表邪頭痛發汗下氣風脚氣霍亂嘔吐消痰濕
痺肺鬱脉浮大而咳開胃進食毒脉沈細自汗盜汗中焦冷永
祿本云脾胃寒人飲多泄滑按五六月比根引して收むへ
局方分心飲嫩枝大和本州生葉臭膾小加へ食む魚毒と去
る香氣あり香蘇の名金匱一書云霍亂腹痛小少て痛處

と熨を一書云葉茂胡麻油を煎し餘薬を入れて膏薬を作ら
ば年を経たるは用を一新しきと用せハ成膏の色青く成
は

假荆芥龍産後感風項背拘急及張惡瘡瘡痺賊風頭痛口喎
去表邪發汗毒津液涸竭自汗尿數渴風邪を去り汗液發せ
るそ手負又産後風を引扱りふるるよ必用也餘の薬ハ
代薬もあるりこれ等荆芥を使ひてかかはぬを按三位
法眼傳風薬水腫の薬少焙一書云主治麻黄と同し女傳集
遍身腫薬荆芥冬瓜子法るあけひのつる煎用餘の湯水の
ませ及りく方實ハ草通州アケヒ同様ニテ通草月湖方

四物湯に如て瘰癧瘰癧を治す

葛根龍無汗發熱瘰癧難出風熱頭痛酒毒煩渴消渴國脉
沈細よして自汗出るよ多用ハ胃氣を損家の葛根よ
山葛根つよし野葛根ハ法うとさゆる二日酔乃をひらめ
に必むひきれて咽かましく其時水小拌ての免ハのえ
き止む按乾葛ハ生葛汁小對する名の薬選ハ瓜蔓根を必
天花粉小制して用る小例され直ハ葛粉を用て可七
白木散乾葛醫林集福田方葛粉自汗中風小毒の熱病陰痿
母の粉葛のありの薬の頭醫抄痢病葛粉堅く煉て多く服を大和本草吉野
より出物の一の家園の葛を野庄有毒の未聞

淡厚朴能脹滿泄痢胃冷食難消冷痰下氣温中霍亂腹痛冷嘔圍腹脹るとも虚人脉弱るも小誤用ハ脱元氣按福田方赤心の見ゆる種あり皮を去り生姜汁をぬるも三度して灸剉使へ大峯白山者紫色濃味ある上之他所の物ハ老らけ色より下品之方言本艸なまありされハ瘡出来る西忍流覺書食とこれ食毒飲解を明曆妙藥集腫物と寄人寄せゆ小厚朴を粉めー米の醋までまよりみ付く糸方記癩人不焼て煙をかきされは發を菊蕪を生服をると同一種の問題薬と云へーし又浴薬と云るあり椎熱風朴のムロ枝以く百日ユツるーと我實傳屍方見へたり本邦より

木皮を使ふは皆あまたと取用るに有隣あり皮を去るとするも其事ニ楊梅皮桂心等煎皮と深く去りて藥皮の製法の如くさるなり長秀々桂心と取も此製するへー苦辛能腎經卒傷風邪下焦小瘡疥癩惡瘡癥積疸毒腎元冷憊齒齩搖痛味苦き故虫を惡瘡小使ハ按唐土乃書ハ苦參とあり辛字を用ひハ見當らぬ邦人昔より辛字は用必據あるへー漢の倉公齩齒の漱藥ある小今齒齩揺痛み忌ハ筆談の説と取り且老人のぬけ齒の痛は用ぬるといふ又本草ハ小便淋瀝明目乃説ハ取らぬ逐水除伏熱治小便黃赤の説ハ取之と本草參伍至辨見へたり大同類聚

方淡路薬入る女傳集食物の毒小酔たるも苦參の粉と
吞む今胸腹もたぐ苦み狂の如く俗小積乃起るといふ症
世間多く有大抵食傷より起る擺出し用又濕瘡の浴湯
とちして皆效あり本文疥癩癥積の治誠は虚るるの方言
本草二夜計白水に浸し割あふる一書云傳んと思ふ文書
ハ紙に煎汁引へし出るといふ

蔓荻苓 龍尿溢浮腫胸膈中焦痰滯不食暴瀉淋毒尿數人用
之損目汗多人服之損真氣按油の紙帛を汚し荻苓末を搽
て油氣脱す婦女の髮枯たる末につけし洗へハ粘氣去
る鷹取方面瘡胞黧等荻苓末蜜酒和し付しつゝあめて痰膩

と去る哉知は

貴橘皮 龍散氣下氣咳嗽嘔吐痰結不食泄痢利水殺酒毒出
聲散表邪永祿本云治霍亂消魚毒吃噫毒自汗盜汗肺虚寸
脈沈細永祿本云表虚氣耗按古ハ橘柚複名ありし神農
本草にて知るし即今の蜜柑に單ハ橘とも考工記橘踰柚
淮而北為枳
と尤かま列子吳楚之國有木為櫟
酸食其皮汁已憤厥之疾渡淮而北
化為枳焉櫟
柚いへるハ禹貢孔傳ふよは菓の上小就く大小とさ
詞の後世橘と柚と二樹の名とあり別ハ柑字出たれハ愈
辨して愈遠し思ふ人ハ橙とも混するや塩麩抄に見ゆ
頰醫抄柑子皮冷氣と治するも橘皮小ほされりといふ橘

ハ今の多ちたるふして柑子ハ即蜜柑ニ本文ハ蜜柑皮乃
能めて今試ニ咽門ニ属する病ニ效速ニ五体身分集大舌
ハ舌下小腫く生さ大柑子皮灰付ふ小舌ニせよ大柑子
コハヤ
ふ妙つし明曆妙藥集集鼻膏硬ふ丸なるら黒焼よりて管ふ
く吹入今試ふ倉卒黒焼よりハ直ニ煎服して可ニ西忍流
覺書云大便を止め堅むる物ニ一書ふ蘇合香圓の方を寫
して訶梨勒皮より橘皮あり寫し誤とハみへ也蓋訶梨勒
皮の得へかりき故ニ橘皮代用て代する也女傳集八味
丸山茱萸より山椒あるハ椒氣下達の意とくより一書
紫金錠の山慈姑とく井とく本綱乃主治ふ合と此等中

古名醫の工夫より出ツ潛心玩味也へ

伽白朮 能暖胃嗜食虚痰濕痰虚瀉宿食風寒濕痺圍腎精燥
耗脉數按延喜式蒼朮なりれハあく乃産皆白朮よりへ
氣を補ふハ人參なりれとも蒼黒人小參及て火邪代助く朮
を用るしと醫燈配劑小見ゆ少彦名神ハ平安城五條天神
ニ毎年節分ころ小詣て白朮を取て服し疾病を除く神代
の遺風ありんと本朝醫考小見ゆ焼て邪氣惡臭除去り疫
氣を除く鹿朮より糊と和し引のへて大線香とくへしと
大和本草小見ゆ又女傳集髪のかき落るハおけらの根煎
あつへ一書云衣帛小墨乃付するハ白朮を煎して何らへ

生地黄 能産後血上薄心悶絶五心熱毒脉遲胃虚吐逆案是
生乾の能毒に福田方地黄冷濕乃藥脾胃を傷る方言本州
虫ふたはものこ延喜式地黄煎あり蓋當時甘草煎と並
行ハるる今の水飴の如し故ふ今其名を襲て膠飴或地
黄煎といふ新明集耳鳴水のあるやうの音セハ地黄煎
ふして温てぎんく入かへよ元和寫藥方足のうら切小黑
焼ふして切目ふ付よ大和本草肥大あると用へ上品大
和より出つ唐ふまきれり其國小地黄村あり熟地黄能腎
虚熱産後熱妊熱症熱眼虚耳鳴勞瘵脉虚弱ハ熟洪實ハ
ハ生案造釀修治云地黄乃蒸中むつかきりあり市小

て賣ハ鐵鍋めて煮るる用へる婦人良方も自製
と用とあり是買者の誤に俗人も地黄丸調合まこれハ見
易きやうふ記置へき又修治纂要小蒸て干たると熟といふ
製法生と同一といひく生乃下ふも委一かは是書と編
る者の誤に俗人地黄丸と製する時醫家小尋問へども九
蒸九眼は怠慢して畧は是製する者の誤にあへるる食
物ハ用く快とかり況藥おや軒岐救正論今の醫者便ふ
従ひ酒を煮日を経て用古法は乖とありかたりる地黄
成惜むハ用る者の誤に地黄生なると水埃以て試むとつ
むものよ肥て太きを好酒を縮砂乃末を拌せ其内ハか

き勻へ柳木の甌を瓦鍋の上よ置て酒めてむし氣と透志
 免取出しひゆけ目ふちし再縮砂砂以て酒ふかきませ蒸
 して眼を如珠丸くむし丸くひ眼し木白めて搗爛し目
 おほし又搗き末しし用醫學入門の生地黃の搗汁ふく
 むし願生微論のハ柳の甌を荷葉を志くとあり考合へし
 鹿茸已下四物能毒を不載本草を考ふ古の鹿茸ハ必袋角
 あり常の角とも使ふし大和本草鹿角春生夏長秋堅冬
 脱萬葉集かきろくときぬふまじりたをまじらさうきせひ
 かりする時ハ素より契沖ハ廉角採取て藥とせしとけ
 陰痿の藥單味末服を頌醫抄房中術地骨皮薯蕷と同く

酒をて用 本藥白馬莖の代り御藥院方に見へ鹿茸の代り
 本藥白馬莖の代り御藥院方に見へ鹿茸の代り
 本藥白馬莖の代り御藥院方に見へ鹿茸の代り
 現又腰痛に用る法あり云生魚と同食さへし小蘆方
 金瘡氣付藥黑神散氣上り目舞心遠く成ニ鹿角打碎キ土
 器に入ヌリフサキ一日一夜炭ノ火ニテ焼取出し末ニテ茶
 一服程白湯又四物湯ニテ用へし一書アイスと名つけし
 産後血暈の藥に檢櫃鉤太抵此物牛皮膠と力と同う
 凡膠の入しる藥臭淡惡むしハあれを代用へし今試る
 潤腸の能ありて老人便秘等に用るし天正記菊亭公の
 右腿脚筋痛ふ用ひし健步丸あり今本藥を君として此丸
 子試製し屢用屢驗生屑も黒焼も功同ししりとも細ふ

別ハ閉証又ハ生脱証又ハ黒焼を用へきり金瘡出血小常
ハ炒さる薬も炒て用る如し一書焼末して齒磨りす蘭
室秘藏羊脛骨灰に似しり

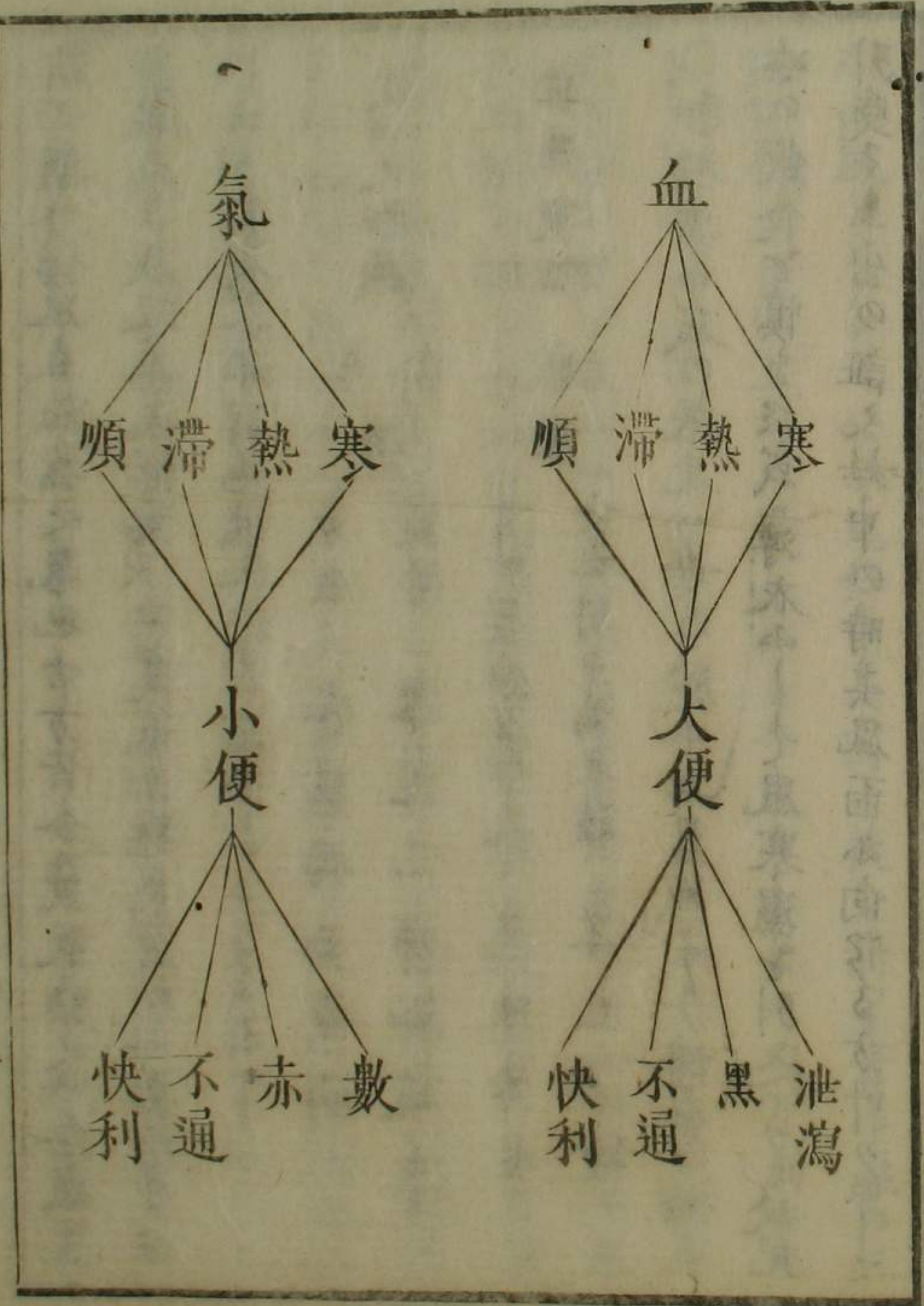
石灰女傳集産後玉門を痛ふ石灰三升炒て黄色より水
六升入かた合てきまり一匙たる上をとり又よきかん
ふ何れもめひくくゆてる本綱引肘后灰一斗水二斗中
古名醫其一斗をちりの三升
は準せ五体身分集脱肛小煮て故帛に裹て其上小居せ冷
ハ取かへし鷹取の書脇香石灰青木香白礬等分竹葉煎湯
よて洗ひ付よ元和寫藥方あり志の薬石灰文蛤末等
分水ぬ紙や付紙をふふふへし明醫妙藥集疣目石灰

とぬりてより小蘆方深き疵より何の薬ふりとも石灰
と加て吉按東國より八王子ふ出ツ昔の石灰ハ志述小異
し紀の國みく菊銘石焼く作里しと方言本草に見ゆ
硫黄本草綱目時珍曰倭硫黄佳大和本草温泉あり處より
湯の沫を煮せハ硫黄となる醫療手引草乾霍亂大腹痛手
足もかた一時乃内小死する病臍上ふあしハ金瘡丸を用
へし端的吐きりし其方硫黄寒水等分丸一書云此丸鷹
の諸病治すこれ結糞と通すれハ湯液本草將軍の
名あり證治要訣熱
黄薬多秘唯硫
黄煖而通元來瀉藥俗説附子硫黄と峻補の薬とする
誤と全九集小辨せり頓醫抄玉門廣と治方硫黄煎て洗ゆ

てよ元和寫藥方疣目硫黄よく揩き明曆妙藥集積根藥硫
黄百艸霜等分明礬能ふくせて右一色の藥の五分一入鹽
湯にて朝夕用一書云齧齒挿てり一主能雄黄ふ近一
書云細末して喉痺吹へ一書云小塊鼻を塞て寐せハ遺
精と治と一書云一塊を帶せハ狐狸魅とるるあり
甘葛延喜式は出つ和名抄頰醫抄及先輩の説千歳菓と
兼良公の頃までハ世人千歳菓ふ充る物と見知り一の方
今其物残失て扱れと定むる葛蔓と四月の灌佛中元の
靈祭民間あゆ茶枝用蓋甘葛るるへきを今の額草ふ似た
る物ハ是甘葛を見失ひし後みかたりし之又甘茶とる

いハ形状五爪龍に似たり救荒本草の絞股藍といふ又會
水藤ふ充る物ハ本曾方言行者の水西國方言あまぢやか
つら或是と甘葛とて藤敬の説かまゑひふ似たり陳
藏器これと非とて藤頰の説四月莖をつとく自汁出味甘
し春夏間汁炒取とありハ自汁あるハ春夏の際乃とあり
新撰字鏡緒字を用るふりて薩摩にもあるへしとて
りされと葉の狀本草ふ合ふハ勅號記甘草とるふ一の根
と訓を白汁の出る藤といふる欽方言本草ハ艸のはる
さのこつり兼良公以後四百年もさふ其物残失ひ
たり且汁を煎むる法も傳らぬと頰醫抄黑神圓方湯

上小別器小入てあまつら煉るやうふ半日計移るといふ
 めて甘葛煎の製法も料知へ一好古の士昔人千歳薬を充
 一物探索して甘葛煎と再興せよ一奇事ありん
 ○三喜流の一書ふ寒熱の候法圖あり應臨記の説も是ふ
 同一應臨記云百病ともふ大小便の通不通と忘るわうに
 按扁鵲所謂中動二便ふさむる常の如くふしてやむ
 胃別下三焦膀胱ハ藏府ありん經中脈外の病あり
 經絡所謂と心得て濕
 痰根本ふして其能ある薬を加て治さへ云々其書ハ病
 因と風濕二体寒暑燥火四用と建より病因を風濕とせむ
 編頼光癒病の條云傷寒本有濕故古方皆合治
 條を考へ



濕之藥味傷風直動搖之氣也古方皆合發散藥又四季感冒
の藥あり茯苓蒼朮澤瀉大半夏羌活陳皮前胡小香附甘
と有り其茯苓澤瀉羌陳香附皆濕と去るるる

支山人切紙
外 表散 苳陳獨芸棗荊
内 濕 淡滲 苓羌已澤知通車

雲陳夜話 感濕

首如裹似有物蒙 羌陳朮雀
小水閉中滿足腫 苓已朴通

○和極集中風の根元ハ母乃胎中五月めより請出る婦生
冷の飲食を慎まに或薄衣ふして風寒濕を引込し故兒
引受く生出の証妊中の時其風面小向たる方叶りして

半中風とる又云小兒妊中前中後と計り實平虛の三
証診察は月の上旬小榮血あるハ末乃十月めの下旬小生
るくと平と及中旬小留はハ末十月め乃上旬小生は實と
す下旬又留ハ末十一月の中旬小生は虚と及如此實平虚
乃三証を辨して血氣全身の強弱を察す扱十月の全月は
越るハ血氣の熱症盛ふして陽さかへく陰衰る一期熱症
さかんこ十月不足は血氣虚弱なる故陰かち陽衰る
故一期寒盛るれハ皮肉關節のあやつりよるしと知へし
寒勝故こ此理と以て六十歳の虚實診計るこ此等の事春
土の書にも有や以の

○まみ 炭はひ 灰 諸の黒焼ハ炭ハ属一白焼ハ灰ハ属ニ存
 性ト志カクニテ其ノ別ノモ其實ハ一ナリ 田代方胸痛カ
 ヌ木ノ炭末シテノむ今川聞書同症ナキ火ハるリの中ニ
 入ル灰茶一服不トハルニヤ一ト入ル湯ヲ入テ茶一服
 と入すハ一トよキカハルニテ與ヨ和漢三才圖會食椒噎
 者不能言悶亂爐灰少許舐則佳又神俱集水小溺ニ入ル
 下ノ灰ハテ面ナカリトアケル惣身ヲつむヘ一按此法溺
 水ハ限ラズ都テ卒死ヲ救ム法ナリ竈下ノ灰一身ニ入ル
 ムル程ハ急卒得カク一新小藁ヲヤリテ灰ヲ作ヘ一其法
 ハ俵十枚ナカリ焚テ黒クナリタル時輕ク水ヲ入ルキ手

と入テ熱氣ノ猛否試ムカクヒ温暖ナルヲ度ト一一身ヲ
 其中小入ルニテ神氣ノ復ルヲ待ツ又諸灰ノ沈汁各
 其用アリ

○めろろ 薄荷めろろノ名小よハル古人目薬トセ一なる
 一三位法眼傳打目ニ用トワリ又云婦人血ノ薬ニハ
 一ハカク此説唐ノ書ニ入ル本邦ノ使ヒ覺ル
 一

○まやみろろ 龍膽 是も名小よる古人疫病ニ用一なる
 一 名醫別録時氣温
 一 熱ノ主治あり

○つばふき 藁葉とあふろろ 瘡腫ハ治ける民間皆知

きり魚毒を解きゆ大和本草和漢三才圖會醫療手引草並
小いり藁吾の名ハ急
就章に出ツ

○こくたみ 岑州五体身分集陰囊腫小葉と十日酒ふひじ
細末して服を女傳集疔の藥毒たみ田螺塩少入るより合
付へ板坂小兒方痔漏石菖蒲ほし菜と同一洗藥を以元
和寫藥方癰のうつきを止ハこくたみ研粉鉢スリコハチすりて白
物合てはく岑州の名吳越
春秋に出ツ

○ミマ加ふせ 烏頭 方言本州附子烏頭一物の根を蒼朮白
朮の位より元和寫藥方倭侍者傳州烏頭三製ふして一切
腫物の付藥ふ十分一加用早くうますみもちらむふせ古

きを加ふ藥力強く其味は和漢三才圖會蝦夷州烏頭毒

塗鏝如中則生蒜研末傳之古いふと又とつり附子の音轉とつり乃約音に並小訓

不あらは延喜式附子の製法ハ醋に浸して炮するに讀

○ほろつき 酸醬食用簡便黃疸勞熱痰積聚腹痛ふより

塩漬漬久く留て食ら生食る倍效とあるふ今世食ふ人

多きハ胎ふさくたる故なる也女傳集子腹ふさ生さか

福うる血まろして下をふほろつきを煎してそのむ一書

云小便閉根を研碎臍中ふ入上ふ紙を貼

○はまおふ福 防風 福田方防風筑紫ふあり大はおふねを

て濱の砂原ふあり即今の濱防風之故方言本草ふも濱ふ

およる物といふは是醫書所謂防風小あつたる人あ
 ましとも有隣以下一漢師小至る迄用ひ来れる防風ありて
 食料ふも供也食用簡便云下氣清頭目去風利脾胃病人小
 兒妨多しゆて胡麻味噌小和用膾に加るハ病人小忌む
 徒然草筑紫の何某つちおね成いみしき薬とそ食ルリ
 後ハ兵の賊とふせ起しる諸註家大根唐云蘿蔔とせりこれた
 ちにおね給ふしそあんるれ豆かろのりとも並ひて此話あ
 り兼好豈七歩の詩を知らんや是ハ疾疫流行の時常ハ
 防風成餌せし人邪氣とくけぬ成つるるへし

○かはしよとき茵陳 葉たうり使ふ五月中ふ取る葉を

くハ實成用也實かくハ根を用ふ三色一ツふりてんハ
 かくはしよときを用と方言本草小見也國産とよし
 り新制劑記見也打撲骨痛と治るるり外科捷徑小見ゆ
 變蒸に用るる太田澄玄本草説小見也小兒發熱ハ屢用
 屢驗

○阿せみ 馬醉木 今川聞書乳腫黒焼付る元和寫藥方田虫
 小黒焼ふりて付一書云洗劑として肌表の小瘡を治る堀
 川百首取つちけ玉田横野のたられ駒はくしつ岡ふあを
 こ花さくこハ馬醉木乃名ふよりてふめふこ馬醉木も雞
 冠木とあふ傳りて唐山小其名を給ひしなるへし

○さいかふー 皂角 方言本草腫物何の内薬ふる加へー早
くたり破道根をぬく田代方山病すく悪瘡の秘事西海枝
煎吞へー定業の病ハ聴てかへさかへきぬは言と知る元
和寫薬方腫物内薬西海子の小枝皮灰むきてきさむ黄菊
春夏ハ莖葉秋ハ花冬ハ根を用右合せ水天目一杯入て七
分煎用秀記癩の問薬皂角子焼火嗅烟云菖蒲厚朴本薬
功同神俱集水ふ濁せて絶入するよさいりひー灰粉ふし
くひとりの白根を搗ちわけて其汁あて丸ー薄き紙ハ
綿小包と大便道へ入へー是尋常牛角の如き物めて猪牙
ふあふんさいかふの轉音ハ皂

本朝醫談

三十一

○つばき 椿一立傳書五稔鼻瘡は葉を煎ー洗益田良繼妙
薬集下血ふ老ら玉つたれ煎用本草李邕云冬青似椿この
と岡村尚謙いつりははき乃油續記小海石
榴油とて灰油も唐土人用ると知らぬ
○とりもち 續膠 良繼妙薬集むれむー小蕎麦粉をかき液
きて用又乳腫み酢ふさきく付る安藤甫實書云瘰癧あり
穴あきて不愈ふをちを穴入上ふ膏薬を付へー一書云
痰の薬丸ーて挽茶袋衣白湯下又寸白薬丸ーて湯めく服
と一書云爪ならみ指りて指ふまく按此物彈丸大を焼て
香氣一室に溢る木脂小生結の香あり本草鈞衡拘骨條採
木皮作粘穢之説錯
簡宜附
冬青條

本朝醫談

四十

○赤からんほ赤蟀 和漢三才圖會深赤者燒末治喉痺及小
兒口舌病神效本草不載兼康傳書より本方及複實の
未茄子黒焼等の方丹三位親康不出り

○はちのま 蜂房 方言本草刻酒ふ浸してあり使ふ五体
身分集閑蹇を起さ方呂蜂灰車前艸春て絞る汁ふ和
て塗ハ發する有り禁物五辛生菓酒ふ醉へかゝり又云陰
を大小長く成方八月中旬大呂蜂を取て生絹袋に入陰乾
し二百日あつて半分ふして土器に入白焚み濁酒を用
て飲め半分をハ唾ふ和して陰ふ塗せ四十日あり其效あ
る此方機を強くあるは是房中家の遺方なり宇多天皇露

蜂をめぐり玉ひしり扶桑畧記小見り蓋此等の方あり

昔ハこゝも房中家の醫あり故衛生秘要抄あり
書もある漢藝文志房中家あり史記倉公傳接陰陽の書
入卧内於後宮秘戲常在側こゝも房中家又通乳薬とある
向へ唐土にも後世此術を治ひしり

○たぬりり 文蛤 萬外集要白神散蛤貝耳の白を炭火ふや
きてたぬるの汁ふみ洗ひ目ふかきぬめて瘰の口ふ
けけ何乃瘰もより

○かもしのつ乃 鈴半角 新製劑記決して國産を用
舶来ハふかき物一書云酒客の下血ふ用る

○さるのゐ猿膽 盛哀記源義仲ふさき病ありて常小猿膽
を用ひしよし見ゆ蓋今人の熊膽哉用る症ありへ唐土
小ても昔ハ牛羊豕の膽ハ使へし熊膽を用るハも加
る也唐書地理志諸州の土貢を舉
る也

○ぬお狸 俗小黒毛の祢之哉勞瘵の藥としひ傳ふありて
考ふ狸骨治勞尚書故實荀與善書寫狸骨治
勞藥右軍臨之謂之狸骨帖 せりハ祢也
あるへ唐人狸と猫と混同する故野狸とせりも斯邦
ハたぬきふありさゆとしひ傳へし醫學千字文狸氣
馨匂注祢古也

○ほそのを 臍帶 見宜妙藥集小疱瘡み用ふ凡人部の品は

好ましくぬこ若臍帶哉要せハ孕婦を剝剔するふいたる
るし神農氏黃帝氏人髪を用ひて人哉用るの偏をなせり
今昔物語平貞盛朝臣あは時身小惡瘡出来りれハ京より
醫師を迎へ下して見せしりあれハ兒干としひ藥を以て
治さへし左きくハ愈へかゝれとしひ兒干とハ妊婦の腹
とき起て男兒をれをそせ哉藥小加へて調合するところや
貞盛其子左衛門尉維衡と呼て此藥を求るる世小披露あ
るてハ後難のかきりし汝乃妻懐妊幸ふ我はあはる
よとのそむ維衡目もろむわとふおほえりれとも心得
ゆとやかくて醫師ふさしくかたりけきえ醫師聞て我を

の難をひらきやへしとて館に往て薬を求させしやと
問ふ貞盛それハ左衛門尉の妻懐妊しとるを乞うけたり
と答ふ醫師それハ何ふせん我胤ハ薬小をくればかきせ
強くしつた炊飯女の懐妊して六月ふるは引出させ
て腹をさけく見る又女子有りければ打捨て又外も妊
婦を求て腹をさきく男子を得薬を調して病を愈しり
此度の報謝として醫師より紀袋束朱錢を多くあつて
後左衛門尉をよみて我瘡見干ふて愈たるよしを此醫師
披露せんといふかひなき此醫師をも害して人口浅ふさ
かんと思ふに汝道ふまらうけて京のある處に射落さ

へしつた左衛門尉いともやまにるよ其用意仕らん
て急な醫師小會て老くのるはやく上りな時山
まて送まつけられし判官代を馬ふのせき足下ハ歩
く越ゆへ先間のう生々せ々ワられかされかく昔
ことり醫師手をすりてよゆへに酉時計ふ出立し
とつる極ふ山を醫師より下りて従者の如く
有りて行時盜賊出来て馬のりり行判官代を一矢小射
落しけり従者皆あけちりり醫師ハはるあく京小上
著しりり貞盛ハ将門征伐の時名高き将有りかは不仁
の行あり醫も亦くは藥物を使ひしハ仁術といふ事哉

ちるぬ昔人兒干を用ひし頃醫抄を讀て知られたり
 斯邦あてはくてか、存物哉用ひ初へきこれ唐山より起
 又しる事あり 唐書五行志大和九年京師訛言節注為上合
 金丹生取小兒心肝密旨捕小兒無算住陰
 相告曰某 處失幾兒 新見物詰享保より五六十年以前みいらせり
 藥流行して歷々の大名も毎日三四度つゝ五分七分のむ
 男女ともみつら此まぬ人あり醫方口訣の頭書も天文
 祿以来蠻人貨易乾枯之屍其骨節筋肉俱備不知作麼制作
 其氣甚惡名曰味伊喇上自士夫下及民家莫不蓄藏以為奇
 藥妄珍穢物觸汚已靈愚之甚也治病豈無其藥何須汚穢惡
 臭之屍哉且犬不食犬而人食人可乎

○歳首小供さるるひつみといふ物ハ唐土よて栢枝大楯
熙朝 樂事の類をれともひつみ乃名ふよ依にくへき物哉
 此みあつたる物ホーて所謂長生の藥に乾粟ハ食用大
 小人子益あり諸病不用へーと食用簡便に見ゆ 田代方身
 立タルニ粟ヲ粉ニシテ飯ニテ付ヘシ一日一夜ヌケル一
 書云金瘡早ク口ノ合タルヲ開カシムル方粟ヲ研テ付ヨ
 と古秘穀ヲ代ふへー又病を治るを 草薺説者毛の有無
 と論はれとも百一
選方藥角鹿茸丸草薺去須とあれは須ある物あるを本草
 不須あると漏しするはり大和本草性冷江戸産より
 たのハ疝痛の藥ニ本草ニ其主註なれは斯邦の人使
 ひ覚へしゆつり葉ハ五体身分集は腹中つかへる食事
 せくす或酒熱として胸中の煩ひ苦きを治る方紅葉

煎服 蓬蒿筆露云様ニツ 一立方虫腹病正月かぎりのわみ

さくさくゆつて葉をきりきりきりする 泥管笠各手の内一束

三把山椒一合水天目五杯入て三杯煎ぬすく

吞又慶祐方癰疽中流湯ふも和皮を大に入たり又老く

つり葉成用るる明曆妙藥集ふも見ゆら白ハ貫衆の一

種やふくくハ古本艸の牡丹昆布海藻及榧實の能皆

本草不出り 本草新編榧子殺虫最勝從來未有用湯藥者

切片用之至妙用入湯劑虫痛立安定又榧油

本綱にいはいはされハ唐山人はをきらぬ欲カスハルといふ

紅毛人渡来りあるのかやの油を見て上品第一の薬といふ

血を去腰痛ふゆりてよしといふると聞

○斯邦のほーあこひ海外めて珍貴するる世の知る所を

孝靈天皇四十五年秦始皇位小即く仙人方術を好み不

死の薬我を求む 上古國人の長壽ありしを秦國にて聞知

あり茅亭客話僧能光あり 其時我邦より三皇五帝乃書

籍を求めり 始皇其書及び孔子全經を贈りし 塩囊

抄不出り 孔子全經ハ仲尼全經の事あり包し前漢の世

までハ此書存せし故劉歆の太常移文小其目

此時彼小與へし不死の薬ハ石决明あり 醫心方に

見えられハ沙丘にて車小積し鮑魚是素問血枯と治を

る鮑魚亦同一 あし小蛇字成用る魚より虫より互小用

ゆるく 字彙補義 字典所引古本草紫豨荀子紫紉 紉字も

小音傳 漢書王莽ウ食ひし腹亦皆此物なり 江隣幾雜志鮑

魚俗云决明可

乾食一枚直千錢今の本草者流大なるを決夫延年八人の
明あをひと小なるを毀こに去ふとす
よはるぬ所をふよりて人事の存問に必のありあをひを
贈る不死の薬を第一ふを存あり失のり後世食治の法を
鹹かん甘平益氣強力細小
劉食を或酒を和し用

○大東世語新羅國使來曰國王后有病聞日本有良醫丹雅
忠典藥頭忠願得遠假以託治白河下公卿議其遣不衆議未
決源帥後至乃云外國王妻死於我都無關於是議定謝其國
信時公卿報書以禮辭多闕輟不奏肯令江匡房作此條誤也
文有言雙鯉難達鳳池之浪扁鵲豈入雞林之雲
○新羅國より國使來りしふあり又雅忠をさして乞ひ
しふあり其頃西邊小疾疫流行して醫藥を賜るありあ

アキ其回歷する醫を高麗國より請求めたり雅忠ハ中
官をれハ西州の廻歷ハせさらしありし小朝野群載の文
按舉て證と高麗國禮賓省牒大日本國太宰府當省伏奉
聖旨訪聞貴國有能理療風疾醫人今因商客王則貞廻歸次
仰因便通牒及於王則貞處說示風疾緣由清波處選擇上等
醫人於來年早春發送到來理療風疾若切效定不輕酬者今
先送花錦及大綾中綾各一十段麝香一十斤分附王則貞貴
持將去大宰府官員處且充信儀到可收領者牒具如前當省
所奉聖旨備錄在前請貴府若有端的能療風疾好醫許容發
送前來仍收領正段麝香者請牒已未年十月牒少卿林榮太

宰府解申請官裁事言上高麗國牒一通狀右商人往返高麗國古今之例也因茲去年當朝商人王則貞為吏開罷向彼州之間禮賓省牒一通相副錦綾麝香等所送也是則聞醫師經迴鎮西之由牒送肯件則貞所申也者異國之事為蒙裁定未檢知件錦綾麝香等何取不請取先相副彼牒狀言上如件謹解承曆四年三月五日日本國太宰府牒高麗國禮賓省去迴方物事牒得彼省牒當省伏奉聖旨仍收領匹段麝香如牒者貴國犯霜露於燕寢之中求醫療於鼇波之外望風懷想能依依抑牒狀之詞頗幸故事改處分而曰聖旨非蕃王所稱居遐陬而跨上邦誠彝倫所歎况亦託商人之旅艇寄殊俗之單

書執圭之使不至封函之禮既虧雙魚難達鳳池之月有鵲何入雞林之雲凡厥方物皆從却迴今以狀牒兼曆四年月日
○蕉堅集絕海り三山詩と載る熊野峯前徐福祠満山藥艸雨餘肥只今海上波濤穩萬里好風須早歸明太祖賜和云熊野峰高血食祠松根琥珀也應肥當年徐福求仙藥直到如今更不歸陶淵明集序海東之藥草と徐福の故事あり
○明俞璉の金持重弘公小贈る書時代を以て考ふ大内義隆不仕へ一醫るる魚一其文曰日域金持重弘公讀儒書明醫道東國之豪傑也去年春來貢天朝寓吾四明嘉賓館有年矣一日過余欽賜御醫官所講平日所志之藝得岐黃之妙訣

而尤精於針灸予聞其言因奇之遂謂之言曰古云人而無恒
 不可以作巫醫誠哉是言也矧醫家乃司命者猶不可不謹也
 其奧藝固不可以枚舉其切要務在病察致原藥請五性治明
 標本鍼行八法順五行法天度所謂醫無定體應病而施藥不
 執方合宜而用斯言盡之矣今將東還揖別於余予聞海上有
 良藥子居扶桑之右蓬萊閩苑皆隣邑也其地多產靈芝瑞藥
 奇性藥品子歸而富取之他日再貢而來當滿貯行囊惠我皇明
 大醫院老御醫以垂無疆之休子無吝諸時大明嘉靖二十年
 一陽月吉大醫院御醫俞璉書斯邦を日域とりのり揚雄長
門脈訣ふも出ッ丹溪ふ初ふふあふ大醫
院御醫ハ皇明實記正八品月俸六石二斗

○徒然草藥の外唐の物ハなくとも事かくま—世醫唐土
 乃書と學ひ術哉行ふるれば藥ハいゝふも唐不求めつ海
 されと斯邦の藥と海外ふてうらやむるあせハ斯邦あり
 の醫者〜んハ藥もあ〜に尋得て唐の物なくともる加
 く〜徐福來貢藥則本邦藥物多者必矣長崎華商以黃連
 桔梗為勝多取以歸以本草不言之藥治病取驗者本邦之寶
 國醫之良也〜本朝食鑑小のひ名山勝地自產靈藥故泰伯
 採之於前徐福貢之於後然則藥不必出扁鵲之方合之者善
 可以為法何必尋中華之術哉〜向陽林子ハ醫方聚要序小
 のハ是予の本朝醫談の發起するところあり

文政庚寅孟春刻成



本朝醫談二編終

書本朝醫談後

予友柳村奈須君夙受先世遺業精研醫經方之學殆四十餘年予殊注意於

皇朝醫學名家之調為影師承之將絕以祖
玄竹法印所傳一溪先生之學矣於是採慶元以上名家國
手所著遺編殘牘及史傳雜說涉吾醫軼事者討究源委
辨析同異蒐羅薈萃哀哉名醫本朝醫談後刻一書人
咸多先快觀後之復刻此編或曰凡著書者如各精究後
則衡衡不格故詳審予者或不能不鹵莽于及注有
不足續貂之嫌然以此編之精微予于前編世稱醫以
為發軔之作則此編之刻孰不刻之為勝乎君云
強於懷未敢妄出然以予論之其後授之博攷證

之精皆累年刻苦之所得苟而襲之必飽蠹魚之腹
不可可惜之甚哉可不作一證昔人師承之所存凡彙
一則世人之所未言及皆是也與前編併行焉以者其一
二曰人更相證憑遂授刑剛及之讀此編者擴而充之
庶可以矣臨證施治之用矣前編水銀出于沙地之說
世人罕淺而君之稱之客歲有遊勢州者予托其人徵
而得之陶氏云水銀出沙地皆青白色結之果於此編
論高壽之醫舊說定為丹波雅忠而君斷然以為不可
必皆足以彰醫林之耳目矣予嘗演之曰高壽神宥
省牒稱貴國有能理療風疾醫人而未有稱雅忠
唯十刻抄載唐后主三瘡國醫東手因乞雅忠其
稱唐后惡瘡固為傳之謬則其託盛名於雅忠

或未可知也宋史元豐元年高壽國王徽病乞醫茶
二年遣王舜封換醫治徽徐兢高麗國經云
元豐三年仲夏時徽病風疾僅此稱高麗元英
父昌旌錄云熙寧中高麗國王徽病詔醫官馬
世長往治之元豐三年徽又疾表乞大醫三書所
載如此而程資省牒云己未年乃元豐三年實吾
豈曆三年也且牒稱風疾正與徐兢苗徑之言契
而于東西求醫懇切不已則古徽之風疾固為沉
痼矣豈屬之隱也概多名手經迴鑑而未知果何人
邪一措裁當時不許竟不能示起歸之妙于外
邦也嗚呼以書之成固有是哉先賢師承之微以
矯庸流俗學之弊則傳與不傳世自有公論豈俟

予之喋言費乎哉
文政十三年歲次上章攝提格壬辰之月

圓齋後人小嶋尚質撰



竹香石黑尚友書



[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '予之喋言費乎哉' and '文政十三年歲次上章攝提格壬辰之月']

